

# 平仮名の学習

— 行書学習への導入として —

鳥取大学教授 住川英明 すまがわ ひであき

## 平仮名を書く力

私の研究室で今年度から取り組んでいることの一つに、「メモを取る学習活動のあり方に関する調査研究」があります。小学校中・高学年の児童を対象とした小さな調査ではありますが、実施してみるとたくさんの方が見えてきました。たとえば、「内容を要約して短文に書きまとめる力」や「事項の関連性を紙面のレイアウト（書式）で表現する力」の重要性などはその最たるものですが、もっとも基本的な事項として、平仮名を書く力が不可欠であることに気がつきました。考えてみれば、時間的に余裕のある場面では漢字を使って表記していたものが、余裕がなくなると平仮名で代替して表記するようになる、つまり書き換えが行わ

## 2 「筆脈」を実感することができる

ハネは、点画や筆線のつながり＝「筆脈」を示すものです。先ほどの「や」の例でいえば、左から右へ向かう筆順の原則とは異なる、右から左への動きを示すというはたらきを担っています。

文字という図形を認識するための要素として、文字の概形的な要素と特徴的な点画の要素、さらに書き進む動きの要素が早くから指摘されていますが、これらの三つの要素は密接に関連しています。つまり筆順や主要画の書き方が概形に大きな影響を与え、そのことが文字認識のありようを決定づけているということです。

行書の学習指導では「筆脈」を意識することが、まず求められます。途切れることのない一回きりの動きによって字形の実現を図ることが定着していないと、せっかく学んだ技能が日常的な速書の場合で生かされないことになるからです。字形の比較的単純な平仮名で、まず「筆脈」を十分に意識し、筆順の大切さを確認しておくことは、行書学習になめらかに移行するための有効な手立てとなることでしょう。

というお話を聴きました。二つの文字の形が結び付かず、すぐには理解できませんでしたが、筆順のことを考えずに字形を思い浮かべてみると、曲がりの線に長い斜めの線が交わり、そのそばに、はねのある短い線が寄り添う—その形が「や」であり同時に「か」であることはいかにもありそうなことだと思われてきました。平仮名を構成している筆線そのものは実に単純ですから、その関係性の如何によって、まったく別の文字に見える可能性があります。

このような事例を取り上げ、筆線の形や方向を問い、さらには「や」の第二筆に見るようなはねの重要さに気づかせることは、生徒の文字意識を高めるうえで有効です。文字とは本来、曖昧でやわらかな存在ですが、他方では使用する誰によっても同一の字種と認められてしかるべき厳正さが求められます。文字というのはそのような二面性を背負った存在なのだということを、生徒たちに理解してほしいのです。そこから、書字にはさまざまな場面があり、それらの場面に適した書き方があることに話題が及べば、行書学習の意味もすんなりと理解できるのではないのでしょうか。

## 1 文字意識を高めることができる

先日ある中学校の先生から、最近の生徒の書く平仮名を見ていて、「や」と読むのか「か」と読むのか迷うことがある、

## 3 行書の筆使いの基礎を学べることができる

行書の特徴として教科書に挙げられているのは、①点画の丸み、②点画の連続と省略、③点画の形や方向の変化、④筆順の変化、といったことがらです。当然のことながら、それらの特徴をよく理解するだけでなく、特徴を支える技能をあわせて習得しなければなりません。その技能が、曲がり（回り）と折り返し（折れ）の筆使いです。行書の日常への転移ということを考えるとき、硬筆あるいは毛筆によってこれらの筆使いに習熟している必要があります。しかも、いずれの技能も筆庄のかけ方が実現の成否を左右しますから、できれば毛筆によって習熟しておくことが肝要です。

行書のこれらの筆使いは平仮名の筆使いと共通するものです。したがって、行書の学習に先立つ平仮名の学習で、共通する筆使いに習熟しておけば、それを基礎とした積み上げが可能になると思われれます。

## 今後のこと

現行の中学校第一学年用の書写教科書を見てみると、いずれの教科書も単元が

「楷書を書くこと」から「楷書と仮名（平仮名）を調和させて書くこと」へと展開し、そのあとに「行書を書くこと」へ移行しています。もし多くの学校で教科書の配列に従って授業計画が立てられ、実際に授業が行われていけば、「楷書と仮名（平仮名）を調和させて書くこと」の学習のなかでの平仮名の学び直しが、実質的な行書への導入となりえているはずですが、もしそうであれば、ここで私が語っていることは自明のことであるとしてご放念ください。

ただ心配なのは、新しい学習指導要領の書写の事項（第一学年）のなかに、現行のものにはある「漢字の楷書とそれに調和した仮名に注意して書き」の文言が見当たらないことです。第二学年では現行と変わらず「漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方」についての言及がありませんから、学習内容の系統性からいって、やや奇異な感じを受けるのも事実です。

このたびの改訂の趣旨である日常的な言語活動や言語文化の重視ということをおまえても、第一学年で平仮名を取り上げない理由はないように思われます。現行のものと実質的な変更はないととらえるべきでしょう。